

## 朗読劇・広島のある国で（台本）

### 場面1・オープニング

かれん・ 手話歌	平和を願う子守唄  健やかに育てほしいと、親の願い知るように あなたのつぶらな瞳に 明るい明日が写っている かあさんの子守唄は平和を願う愛の声 とうさんの腕枕は 暮らしを守るたたかいの力
語り1・ 河本	誰もがこの世に生を受けたとき、愛情をいっぱい受けか がやく未来の可能性に包まれていたのではないでしょ うか？ しかしそのあたりまえのくらしや未来、人間らしく生き ること、そのすべてを奪ってしまうのが戦争です。 今年に戦後60年、この節目の年だからこそ伝えたい …… これからお話しするのは今から60年まえ、私が10歳 のときに体験した本当の話です。 60年前のあの日、広島でなにがあったか？そして当 たり前の幸せがどのように壊されていったのか？ しばらく私の話に耳を傾けてください。

<p>場面 2 ・ 大阪にて  語り 2 ・ 木南</p>	<p>1935年昭和10年1月4日 私は大阪市東区玉造でうまれました。その頃父は東洋医学をまなび、治療院をいとなんでいました。町の人から「先生、先生」としたわれ、その日も年始のあいさつにきたたくさんの人たちに見守られて私が誕生したのです。 母は父と結婚する前に教会の幼稚園に務めていたので、物静かで温かな人でした。どちらかという父のほうがきびしい人でしたが2人とも愛情豊かに育ててくれました。 1938年・昭和13年に国家総動員法が公布され1940年昭和15年に大政翼賛会ができ、世はまさに戦争まっしぐらになり、だんだん国民の生活もきゅうくつなものになりました。 1942年に弟が生まれました。そのころは生めよ増やせよの時代で男の子がうまれたことを本当に喜んでいました。その後すぐ母も小さい弟をおんぶして竹やりやバケツリレーなどの演習に参加していました、そのころすべての婦人は国防婦人会に属していたのです。 1945年・昭和20年6月、大阪にも大きな空襲があり私の家も町もすべて燃えてなくなったのです。幸いにも家族4人命だけは助かったので大阪のまちを離れて一からやり直すことに決めました。「ご先祖様が必ず守ってくれる」私たちはそれを信じて 本家のある広島に7月に入ってすぐ移り住んだのです。</p>
---	---

<p>場面3・ 広島にて 語り 長谷川</p>	<p>広島に来て1ヶ月、ようやく生活にも慣れ始めたころ、あの原爆の日を迎えるのでした。</p> <p>1945年・昭和20年 8月6日午前8時15分</p> <p>私は学校へ行く準備をしていました、そのころ学徒動員で毎日のように建物疎開作業に借り出されており夏休みは8月10日から20日までの予定でした。</p> <p>父は仕事場となった軍需工場へでかけており、母はトイレに入っていたと思います、</p> <p>3歳になったばかりの弟は、トイレの戸にもたれて母の出てくるのを待っていました。</p> <p>「一行は男の子なのに甘えん坊やなあ」と言って学校に行こうとしたそのとき・</p> <p><b>爆音</b>_____</p> <p>みどりあお色の光線が光り、耳が避けるほど大きな爆音が響き吹き飛ばされてしまいました。気がついたときには弟をかばうように瓦礫の下敷きになっていました。</p> <p>もうもうと立ち込める土煙の中で「助けてー」と叫びますが声になりません。弟は私の下でぐったりとしています。私はうつぶせのままひじでいざって上半身だけ瓦礫からはいでて、足で瓦礫を支えながら弟を引っ張り出しました。</p> <p>そのときやっと弟は意識をとりもどし悲鳴に近い泣き声で泣き続けました。</p> <p>目の前の光景をみて茫然としました、さっきまでぎらぎらだった太陽は大きなどんよりとした雲におおわれていました。</p> <p>そして、行きかう人すべてが、皮膚がただれ、とけ、流れ落ちそうな手を前に下げて歩いているのです。「水、水」とうめき声に近い地の底から聞こえてくるような声で通り過ぎていきます。私は泣きさけぶ弟の手をとりただ動けず、その光景を眺めていました。どのくらいたったのだろうか？立ち尽くす私たちを父が探し出してくれました。「お母さんはどこやろうか？」父のその声でやっと現実だとわかり、あわてて探し出しました。母は少しはなれたところで瓦礫に足をはさまれて身動きがとれなくなっていました。みんなまで引っ張ってたすけることができました。</p>
-------------------------------------	---

<p>語り 竹永</p>	<p>父も母も、親戚や近所の人を助けることになり私と弟は比治山へ避難することになりました。「いいか、信子、信子はおねえちゃんなんやから一行を守って比治山へにげて明日の朝まで避難するんや」そう父に言われ、私は弟をつれて比治山に行くことになりました。</p> <p>弟をつれて歩き始めると雨が降り出しました、 「おねえちゃん、おんぶ」と弟がぐずるので、しかたなくおんぶしましたが、その雨は黒くねばりけのある変わった雨で背中におぶってもおぶってもすぐすべり、本当に大変でした。</p> <p>3キロほど歩いて京橋川にたどり着きました、この橋をわたればすぐ比治山なのに川の中にはたくさんの人が水を求めて飛び込んでそのまま亡くなり死体となつて浮いていたのです。足がすくみなかなかわたれなかったと記憶しています。</p> <p>やっとの思いで比治山につき、長い長い夜を弟と過ごしたのでした。暗いくらい闇の中でやけどで眠れない人たちのうめき声、ただれた体ではいかいをする人々、このまま朝が来ないのではないかと不安で不安でたまりませんでした。朝になると昨夜一緒に過ごした多くの人が死体と化してしまいました。</p> <p>「大変や・・・ここにいと死んでしまう」その思いで弟をひっぱるように 父に言われた尾長町の親戚の家までただひたすらあるいたのでした。</p> <p>その尾長町の家には家族4人が再開したのは7日の夜になってでした、おばの家族と8人のあばら家での生活が始まったのです。そのあばら家での生活はもっとたいへんでした。おばさんの息子はやけどで顔がパンパンにはれ、その傷口がうみ、そこからうじ虫がわきそれをとるのが私たち子ども仕事でした。</p>
------------------	---

<p>場面 4 倉敷にて 河本</p>	<p>終戦になってもなかなか生活のめどはたちませんでした。 とうとう私たち家族4人は、父の弟のいる岡山県の倉敷市に移動することにしました。 倉敷は空襲もなく、そのおじは肉屋をいとなんでいるので比較的食べるものがあるというのが理由でした。</p>
<p>木南</p>	<p>1945年・10月15日、私たち家族はぼろぼろの夏服のまま倉敷に到着しました。おじの家族は17歳をかしらに乳飲み子まで子どもが8人、おじとおばとあわせて10人が肉やの2階に暮らしていました。私たち家族はそのすぐ前の家を借りてもらい父はすぐ肉屋を手伝う仕事ができ倉敷での生活は順調にスタートしました。</p>
<p>長谷川</p>	<p>しかし母は日に日に、原爆症がひどくなりついに精神がやんでしまいました。 屋根の上を這いずり回り「助けてー！」と叫ぶので「あの家には化け物がいると近所のうわさになりました。その母を抑えるのが私の役目でした、しかし12月3日私たちが目を話した際に、着物の帯紐をつるし首をつって自殺してしまったのです。 それを最初に発見したのはまだ10歳の私でした。 「おかあさん」 その3年後父も原爆症で亡くなり私たち兄弟は倉敷のおじに育てていただいたのでした。</p>
<p>竹永</p>	<p>みなさんこれが、私の体験したすべての話です、私たち家族が何か悪いことをしましたか？ なぜこんなめにあわなければいけないのですか？ だれが戦争をしたのですか？ お願いします、もう私のような思いをすることももうけして つくらないでください、私の話した事実を少しでもうけとめ、次の世代へ平和を皆さんの手をつなげてください。</p>

<p><b>全員で</b></p>	<p>ノーモア・広島      ノーモア・長崎      ノーモア・被爆者 ノーモア・ウォー！</p>
<p><b>かれん</b></p>	<p><b>人間をかえせの手話歌</b></p> <p>父をかえせ      母をかえせ としよりをかえせ こどもをかえせ</p> <p>私をかえせ 私につながる    人間をかえせ    かえせ</p> <p>.....</p>